

## 習熟度別クラス編成に関する考察(3)

田原良子\*, 堀江美智代\*, 森永初代\*\*

A Study about Streaming English Classes (3)

Yoshiko Tahara\*, Michiyo Horie\* and Hatsuyo Morinaga\*\*

学習者の多様化及び学力低下が進むなか、個人の能力や習熟度に対応した教育が求められている。鹿児島純心女子短期大学英語科においても、平成12年度から英作文と英会話において習熟度別クラス編成を実施している。習熟度別クラス編成の意義と問題点を、学習に対する影響や意識の変化という面から調査するために、習熟度別に分けないクラス編成、2段階の習熟度別クラス編成、3段階の習熟度別クラス編成全てを経験した同一学生に対しアンケート調査を実施した。アンケート結果を比較したところ、習熟度別クラス編成が細分化されるにつれ、授業の満足度が高くなっていることが分かった。また、3段階クラス編成に肯定的な評価が多く見られることから、学生自身も学力に応じて細分化したクラス編成の学習効果を感じていると言える。しかし、2段階編成時と習熟度別編成をしていない時の評価を比べた場合、習熟度別編成の効果があまり見えない等問題点もある。

**Key words:** [アンケート調査] [英語教育] [仮説検定] [習熟度] [クラス編成]

(Received November 5, 2001)

### 1. はじめに

学習者の多様化及び学力低下が進むなか、個人の能力や習熟度に対応した教育がすべての教育機関において求められている。公立小中学校では従来、習熟度別指導が認められてはいたが、実践校は限られていた。しかし、2002年4月の新学習指導要領導入までに公立校での対応を求める声が強くなり、文部科学省自ら習熟度に応じた指導資料や指導方法の研究開発を進めていく予定である<sup>1)</sup>。

学校の特色として、習熟度別クラス編成を挙げる短期大学や大学も多い<sup>2)3)</sup>。福岡女学院大学短期大学部英語科では、カリキュラムの特徴として習熟度別クラス編成の強化を挙げており、TOEIC IPを利用してクラス編成を行い、半期ごとに学力を診断し、著しく力が伸びた学生は上のクラスへ移ることができるとしている<sup>4)</sup>。金沢大学外国語教育研究センターは、学生の目的や習熟度に応じて、必要な語学スキルを伸ばすためのカリキュラムを実施すると述べている<sup>5)</sup>。具体的には、習熟度が低い学生には基礎学力習得コースを、習熟度が高い学生にはプレ

\* 鹿児島純心女子短期大学英語科 (〒890-8525 鹿児島市唐湊4丁目22番1号)

\*\* 鹿児島純心女子短期大学生活学科生活学専攻生活ビジネスコース (同上)

ゼンテーションやアカデミックライティングのような上級コースを開講し、また、留学や受験を控えた学生等には集中コースを開講するとしている。

本研究の目的は、短期大学における習熟度別クラス編成の意義と問題点を、英語力の変化や学習への影響等から多角的に検討することである。本研究の第1報として、鹿児島純心女子短期大学英語科（以下本学科と言う）における習熟度別クラス編成導入に関する経緯、概要、及び習熟度別クラス編成（2段階）の成果について報告した<sup>6)</sup>。第2報では、英語力テスト結果から、学生の能力に応じて3段階のクラス編成が適切に行われているかを検討し、その影響を分析し、学習効果や態度の変化及びその要因等について考察している<sup>7)</sup>。

本論の目的は、習熟度別に分けないクラス編成、2段階及び3段階の習熟度別クラス編成全てを経験した同一学生に対し、英作文及び英会話に関するアンケート調査を実施し、それらの比較を行い、習熟度別クラス編成の意義と問題点を、学習に対する影響や意識の変化という面から調査、分析することである。3学期に渡って異なるクラス編成を経験した同一学生の意識変化を調査することにより、クラス編成と、授業の満足度や難易度、学習意欲、英語力の変化等との関係や、クラス編成の細分化の影響等について調査し、学習に効果的な習熟度別クラス編成の在り方を探りたい。

## 2. 調査対象及び方法

調査対象は、本学科に2000年4月に入学した学生80人である。

調査方法は、アンケート方式をとり、全部で3回実施した。1回目は、習熟度別クラス編成前の前期授業終了時（2000年7月）に、2回目は上級クラスを設けた2段階クラス編成後の後期授業終了時（2001年1月）に、3回目は上級・中級・基礎の3段階クラス編成後の2001年前期終了時（2001年7月）に実施した。1回目のアンケートについては、本研究第1報を参照されたい。3回目のアンケートについては、第2報に詳細を報告済みである。

実施した3回のアンケートは、同一学生を対象とし、回収人数は、1回目80人、2回目77人、3回目74人であり、回収率は、1回目100%、2回目96.2%、3回目93.7%である。

アンケートの目的は、習熟度別編成が学習に及ぼす影響を学生がどのように捉え評価しているのかを調査し、その意義や問題点について考察するものである。

1回目のアンケートは、主に、「授業の難易度」、「授業に対する満足度」、「習熟度別クラス編成について」及び「基礎英語と上級英語について」の4つの部分から構成されている。「授業の難易度」及び「授業に対する満足度」では、英作文及び英会話の難易度や満足度について尋ねている。また、授業に対する満足や不満の理由として、レベル、学習項目、進度に関する質問項目も設けている。「習熟度別クラス編成について」では、クラス編成に対する学生の希望を尋ねている。

2回目のアンケートは、1回目とほぼ同様であるが、後期には基礎英語と上級英語が開講されていないため、それについての項目はない。また、「習熟度別クラス編成について」に既に行っている習熟度別クラス編成の是非に関する質問項目や、それが授業の理解度、授業への参加、英語上達への効果、学習意欲などに与えた影響についての質問項目を加えている。3回目

のアンケートでは、2回目のアンケートに加えて英語力変化とその要因に関しての設問を設けている。

1回目のアンケートは、無記名式であり、2回目と3回目は個々の学生の意識変化及び学力との関連を把握するために記名式である。

回答の形式については、学生の一般的傾向を知るために、5段階の多肢選択法が中心となっている。理由を述べさせる箇所及びいくつかの項目の回答に見られる「その他」などでは自由記述としている。

このようにして得られた3回のアンケート結果に対して、各項目についての単純集計及びいくつかの項目間のクロス集計を行った。これらの集計及び統計解析には、未記入など分析不可能なものを除いて、SPSSを利用した。ただし、各項目ごとに欠損値を処理したため、合計数が異なっている。本稿においては、第1回アンケート（習熟度別クラス編成前の1年前期実施）回答者を1群、第2回アンケート（2段階クラス編成後の1年後期実施）回答者を2群、第3回アンケート（3段階クラス編成後の2年前期実施）回答者を3群と呼ぶことにする。

差の検定では Kruskal-Wallis 検定と Mann-Whitney 検定を行い、独立性の検定では正確確率検定を行った。検定項目及び検定結果を表1, 2, 3に示す。

表1 1群, 2群, 3群間の差の検定(Kruskal-Wallis検定)の結果

No.	項目	結果
1	英作文難易度	***
2	英会話難易度	***
3	英作文満足度	***
4	英会話満足度	***
5	英作文満足度理由：レベル	**
6	英作文満足度理由：学習項目	***
7	英作文満足度理由：進度	***
8	英会話満足度理由：レベル	
9	英会話満足度理由：学習項目	**
10	英会話満足度理由：進度	***

\*\* p < 0.05 \*\*\* p < 0.01

表2 2群と3群の差の検定(Mann-Whitney検定)の結果

No.	項目	結果
1	英作文 授業の変化	
2	英会話 授業の変化	
3	英作文 作文力の上達感	***
4	英作文 習熟度別クラス設置の是非	
5	英作文 習熟度別の必要性	
6	英会話 会話力の上達感	*
7	英会話 習熟度別クラス設置の是非	
8	英会話 習熟度別の必要性	
9	英作文 授業の理解	***
10	英作文 授業への参加	*
11	英作文 上達への効果	**
12	英作文 学習意欲	*
13	英会話 授業の理解	***
14	英会話 授業への参加	
15	英会話 上達への効果	
16	英会話 学習意欲	

\* p < 0.1 \*\* p < 0.05 \*\*\* p < 0.01

表3 独立性の検定（正確確率検定）の結果

No.	項目1	項目2	結果
1	習熟度別段階数	英作文クラス編成方法	***
2	習熟度別段階数	英会話クラス編成方法	***

\*\*\* p < 0.01

### 3. 結果と考察

#### 3.1 授業の難易度

英作文，英会話について，難易度を尋ねた結果を図1に示す。

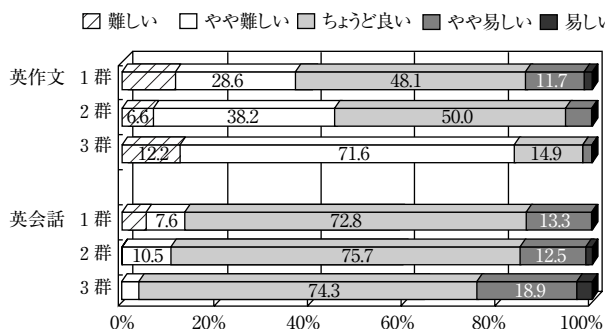


図1 授業の難易度に関する印象

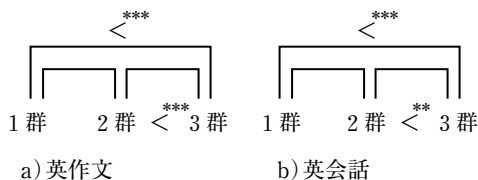


図2 英作文・英会話クラスと難易度

1～3群の差の検定の結果(表1-1, 2), 英作文, 英会話ともに有意差 ( $p < 0.01$ ) がみられた。多重比較の結果(図2), 英作文においては2群と3群及び1群と3群に有意差 ( $p < 0.01$ ) があり, 英会話では2群と3群 ( $p < 0.05$ ) 及び1群と3群 ( $p < 0.01$ ) に有意差が認められた。つまり, どちらの教科においても, 1・2群間の授業の難易度に差があるとは言えないが, 3群と1群及び2群では差があると言える。これらの結果から, 英作文では, より細かい習熟度別編成を行うことで, 授業の難易度が適切になったと感じる学生が増える一方, 易しいと感じる学生も, 全体に占める割合は低いが, やや増えていることが分かる。英会話においては, 適切であるという評価の比率には大きな変化はないが, 3群では難しいと感じる学生が減り, 易しいと感じる学生の比率が高くなっている。第2報で述べた通り, 易しいと感じる学生は基礎クラスに多く, ミスマッチと思える学生の比率の高さがその一因だと考えられる。

#### 3.2 授業の満足度

図3に英作文と英会話における満足度を尋ねた結果を, 表4, 5, 6に満足度の要因についての結果を示す。

英作文における授業の満足度に関しては, 「満足」・「やや満足」と答えた満足群が, 1群, 2群, 3群で, それぞれ42.5%, 46.8%, 63.5%となっている。一方, 「不満」・「やや不満」と答

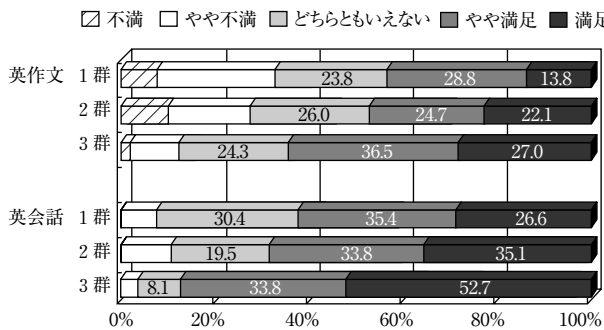


図3 授業の満足度に関する印象

えた不満群は、それぞれの群で33.8%, 27.3%, 12.2%と満足群の結果と反比例している。

英作文のレベルに関しては、「ちょうど良い」と答えた学生が、1群, 2群, 3群で、56.7%, 62.3%, 78.4%と比率が高くなってきている。レベルが高いという回答は3群で約10%と比率が低くなる一方、低いという回答は2群と比較して3群でわずかながら増えている。

英作文の学習項目に関しては、「興味深い」・「やや興味深い」は、1群, 2群, 3群で、36.8%, 32.5%, 44.6%となっており、3群においてやや多い。一方、「つまらない」・「ややつまらない」は、31.6%, 41.6%, 17.6%となっており、2群では、不満の声の方が多く、3群で最も少なくなっている。

英作文の進度に関しては、「ちょうど良い」が、1・2群とも約6割だが、3群では8割近くに上る。極端に進度の合わない「速い」または「遅い」という回答は3群にはないが、1群と2群では、「速い」がそれぞれ11.8%, 6.5%あり、「遅い」も両群に1.3%と僅かだがある。1群と2群では、「速い」・「やや速い」を合わせると、それぞれ25%, 29.9%だが、3群では、4.1%とかなり少ない。逆に、遅いと感じている学生が3群に2割近くおり、1群及び2群より多い。

表4 授業に対する満足度の要因：レベル

	高い	やや高い	ちょうど良い	やや低い	低い	合計	
英作文	1群	6(9.0%)	14(20.9%)	38(56.7%)	9(13.4%)	0(0.0%)	67(100%)
	2群	4(5.2%)	20(26.0%)	48(62.3%)	5(6.5%)	0(0.0%)	77(100%)
	3群	0(0.0%)	9(12.2%)	58(78.4%)	7(9.5%)	0(0.0%)	74(100%)
英会話	1群	2(2.7%)	8(10.7%)	55(73.3%)	9(12.0%)	1(1.3%)	75(100%)
	2群	0(0.0%)	8(10.4%)	61(79.2%)	8(10.4%)	0(0.0%)	77(100%)
	3群	1(1.4%)	1(1.4%)	60(81.1%)	9(12.2%)	3(4.1%)	74(100%)

表5 授業に対する満足度の要因：学習項目

	つまらない	ややつまらない	どちらともいえない	やや興味深い	興味深い	合計	
英作文	1群	7(9.2%)	17(22.4%)	24(31.6%)	24(31.6%)	4(5.3%)	76(100%)
	2群	15(19.5%)	17(22.1%)	20(26.0%)	22(28.6%)	3(3.9%)	77(100%)
	3群	1(1.4%)	12(16.2%)	28(37.8%)	22(29.7%)	11(14.9%)	74(100%)
英会話	1群	1(1.3%)	8(10.4%)	24(31.2%)	22(28.6%)	22(28.6%)	77(100%)
	2群	0(0.0%)	10(13.0%)	10(13.0%)	31(40.3%)	26(33.8%)	77(100%)
	3群	0(0.0%)	6(8.1%)	12(16.2%)	24(32.4%)	32(43.2%)	74(100%)

表6 授業に対する満足度の要因：進度

	速い	やや速い	ちょうど良い	やや遅い	遅い	合計	
英作文	1群	9(11.8%)	10(13.2%)	48(63.2%)	8(10.5%)	1(1.3%)	76(100%)
	2群	5(6.5%)	18(23.4%)	47(61.0%)	6(7.8%)	1(1.3%)	77(100%)
	3群	0(0.0%)	3(4.1%)	57(77.0%)	14(18.9%)	0(0.0%)	74(100%)
英会話	1群	1(1.3%)	10(13.2%)	61(80.3%)	4(5.3%)	0(0.0%)	76(100%)
	2群	0(0.0%)	3(3.9%)	70(90.9%)	4(5.2%)	0(0.0%)	77(100%)
	3群	0(0.0%)	2(2.7%)	63(85.1%)	7(9.5%)	2(2.7%)	74(100%)



英作文の満足度, レベル, 学習項目, 進度に関して1~3群の差の検定を行った結果(表1-3, 5, 6, 7), 満足度, 学習項目, 進度において有意差 ( $p < 0.01$ ) が, またレベルにおいて有意差 ( $p < 0.05$ ) がみられた。多重比較の結果(図4), 満足度においては1群と3群 ( $p < 0.01$ ) 及び2群と3群 ( $p < 0.1$ ) に, レベルでは2群と3群 ( $p < 0.05$ ) に, 学習項目でも2群と3群 ( $p < 0.01$ ) に, 進度においては1群と3群 ( $p < 0.05$ ) 及び2群と3群 ( $p < 0.01$ ) に有意差があった。



図4 英作文クラス編成方法と満足度及びその要因

この結果より, 全ての項目において2群と3群には差がみられるが, 1群と3群に差があるのは満足度と進度のみであり, 1群と2群に差があるとはどの項目においても言えないことが分かった。

2群における傾向をみると, レベルに関しては高く, 進度に関しては速いという回答の比率が1群を上回る。また, 学習項目に関してもつまらないという回答が4割を占め, これも1群より多い。これが果たして習熟度別クラス編成の影響なのか, 或いは他の要因がかかわるのかは更なる調査を待たなければならないが, この結果からは, 2群のレベル, 学習項目, 進度に関して, 習熟度別編成を実施した効果があるとは言えない。しかし, 1・3群間或いは2・3群間には明らかに差があり, 3群の方が評価が高い。習熟度別編成を細かくした3段階で満足度が高く, 各項目に対する評価も高かったことは, 3段階編成が好影響を与えた結果であると言えるのではないだろうか。

英会話における授業の満足度に関しては, 「満足」・「やや満足」と答えた満足群は, 1群, 2群, 3群で, それぞれ62.0%, 68.8%, 86.5%と, 習熟度別編成が細分化されるにつれ満足度も高くなっている。「やや不満」と答えた学生は, それぞれ7.6%, 11.7%, 5.4%でどの群においても少なく, 「どちらともいえない」と答えた学生は, それぞれ30.4%, 19.5%, 8.1%で, クラスの細分化に伴い少なくなっている。

英会話のレベルに関しては, どの群においても7割以上が適切であると答えている。また, 「高い」・「低い」と答えた学生が皆無かほとんどいないのも各群に共通している。しかし, 「高い」と「やや高い」を合わせると, 1群, 2群, 3群で, 13.4%, 10.4%, 2.8%となり, 3群の少なさが目立つ。一方, 「低い」或いは「やや低い」と答えた学生は, 3群の16.2%が最も多い結果となった。

英会話の学習項目に関しては, 「興味深い」・「やや興味深い」が, 1群, 2群, 3群それぞれで, 57.1%, 74.0%, 75.7%となり, 1群と比較して習熟度別クラス編成を行った2群及び3群の比率が高い。一方, 「つまらない」・「ややつまらない」は, 11.7%, 13.0%, 8.1%で, やや3群において少なくなっている。「どちらともいえない」は, それぞれ31.2%, 13.0%, 16.2%で, 1

群に比べ2, 3群がかなり少ない。

英会話の進度に関しては、「ちょうど良い」が、1群, 2群, 3群で、それぞれ80.3%, 90.9%, 85.1%と、どの群でも8割以上の学生が適切と答えている。「速い」・「やや速い」は、14.5%, 3.9%, 2.7%と、習熟度別編成が細くなるにつれ減っているが、逆に「遅い」・「やや遅い」は、それぞれ5.3%, 5.2%, 12.2%で3群が最も多くなっている。習熟度別編成の効果として、速いあるいは遅いと感じる学生が3群においては少なくなると期待していたが、遅いと感じる学生が3群で増えるという結果となった。

英会話の満足度, レベル, 学習項目, 進度に関して1~3群の差の検定を行った結果(表1-4, 8, 9, 10), 有意差が満足度 ( $p < 0.01$ ), 学習項目 ( $p < 0.05$ ), 進度 ( $p < 0.01$ ) においてみられた。多重比較の結果(図5), 満足度においては1群と3群 ( $p < 0.01$ ) 及び2群と3群 ( $p < 0.05$ ) に、学習項目では1群と3群 ( $p < 0.1$ ) に、進度においても1群と3群 ( $p < 0.05$ ) に有意差があった。

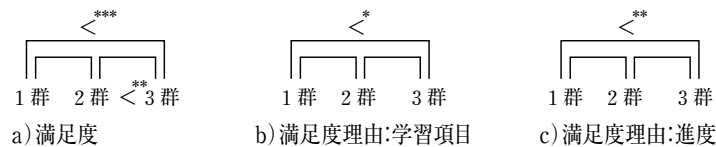


図5 英会話クラス編成方法と満足度及びその要因

これより、満足度、学習項目、進度に関しては群間に差があるが、レベルに関してはあるとは言えない。満足度では1群と2群の差はないが、1群と3群及び2群と3群には差があり、学習項目及び進度では1群と2群には差がみられず、1群と3群にのみ差がある。つまり、2段階編成時と習熟度別編成をしていない時の評価を比べた場合、習熟度別編成の効果が見えないが、クラス編成をより細かくした3段階においては、明らかに満足度と学習項目に関する評価が高い。これは、習熟度編成を細かくしたことで、授業が学力に合っていると感じる学生が増えたことを意味すると思われる。しかし、3群においては、レベルの低さや進度の遅さを指摘する回答が他群と比べて多い。これらの回答は基礎クラスの学生が多いのだが、クラス分けの適切さなどについて、更なる調査が必要であることを示す。なお、プレイメントの妥当性についての詳細は第2報を参照されたい。

### 3.3 習熟度別クラス編成について

#### 3.3.1 授業への影響

習熟度別クラス編成の授業への影響について、授業の理解度、授業への参加度、学習効果、学習意欲の4項目についての結果を図6~9にまとめている。

A. 授業の理解 英作文に関しては、2・3群とも「変わらない」が最も多く、それぞれ57.9%, 45.9%となっている。しかし、「わかりやすくなった」という比率は、2群が11.8%, 3群が23.0%であり、「やや分かりやすくなった」を合わせると、3群では、2群(27.6%)の約2倍近く50.0%の学生が理解度が増したと答えている。また、2群では「わかりにくくなった」・「ややわ

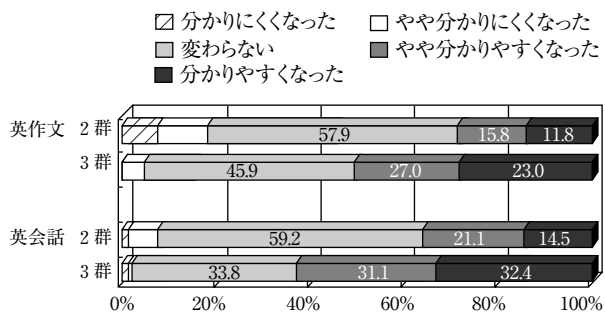


図6 授業への影響 A. 授業の理解

り高い。一方、2群はその約半分の35.6%である。

差の検定を行った結果(表2-9, 13), 英作文・英会話ともに有意差 ( $p < 0.01$ ) があり, 2群と比べて3群の方が授業の理解度が増したということが分かった。つまり, クラスの細分化により, 学生の習熟度に応じたわかりやすい授業になったと言えるのではないだろうか。

**B. 授業への参加** 理解度と同様に, 英作文では2・3群ともに「変わらない」が最も多く, その比率は, 2群が51.3%, 3群が44.6%である。しかし, 3群では44.6%が積極性が増したと答えているが, 2群では31.6%に留まる。逆に, 「消極的になった」または「やや消極的になった」と回答した学生は, 2群の方が17.1%と3群の10.8%よりやや多い。

英会話でも, 「変わらない」が2群で50.0%, 3群で33.8%と1番高い。しかし, 「積極的になっ

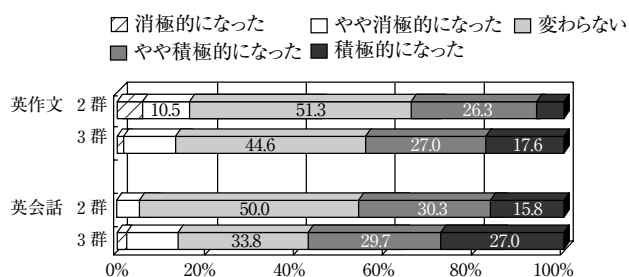


図7 授業への影響 B. 授業への参加

た」・「やや積極的になった」を合わせると, 3群では6割近くが積極性が増したと答えているが, 2群では, その比率は5割に満たない。一方, 消極的になったという学生は, 3群の方が若干多く9.5%いる。これは, 第2報で考察したように, 3群の基礎クラスの評価が低いのが原因と考えられる。

差の検定の結果(表2-10, 14), 英会話では, 有意差は見られなかったが, 英作文では有意差 ( $p < 0.1$ ) があり, 3群の方が2群より授業への参加について積極性が増したと感じていると言える。3段階クラス編成を実施する際, 期待した効果の一つは, 上級クラスに能力の高い学生が抜けることにより, その他の学生がより積極的に授業に参加する機会が増えるのではないかということであった。今回の結果から, 英作文の授業への参加に関して期待した効果が見られたと言えよう。

**C. 英語上達への効果** 英作文の2群では, 英語上達への効果は「変わらない」が46.1%と最も高いが, 3群では「やや増した」が48.6%と最も高い。英語力上達への効果を認めている学生は, 3群では60.8%いるのに対し, 2群では44.7%にすぎない。マイナス効果を指摘する学生も, 2群は9.2%で3群の6.8%よりやや多い。このように, 英語力上達に効果的であったと捉えている学生が, 2群に比べて3群に多いことは注目に値する。

かりにくくなった」が14.5%であるが, 3群では4.1%のみである。これらから, 3群は, 2群に比べて理解度に対する評価が高いと言える。

英会話でも, 2・3群とも「変わらない」が最も多く, それぞれ59.2%, 33.8%である。しかし, 3群では, 「わかりやすくなった」が32.4%, 「ややわかりやすくなった」が31.1%であり, 理解度が増した比率は, 63.5%とかな

り高い。一方, 2群はその約半分の35.6%である。

差の検定の結果(表2-10, 14), 英会話では, 有意差は見られなかったが, 英作文では有意差 ( $p < 0.1$ ) があり, 3群の方が2群より授業への参加について積極性が増したと感じていると言える。3段階クラス編成を実施する際, 期待した効果の一つは, 上級クラスに能力の高い学生が抜けることにより, その他の学生がより積極的に授業に参加する機会が増えるのではないかということであった。今回の結果から, 英作文の授業への参加に関して期待した効果が見られたと言えよう。

**C. 英語上達への効果** 英作文の2群では, 英語上達への効果は「変わらない」が46.1%と最も高いが, 3群では「やや増した」が48.6%と最も高い。英語力上達への効果を認めている学生は, 3群では60.8%いるのに対し, 2群では44.7%にすぎない。マイナス効果を指摘する学生も, 2群は9.2%で3群の6.8%よりやや多い。このように, 英語力上達に効果的であったと捉えている学生が, 2群に比べて3群に多いことは注目に値する。



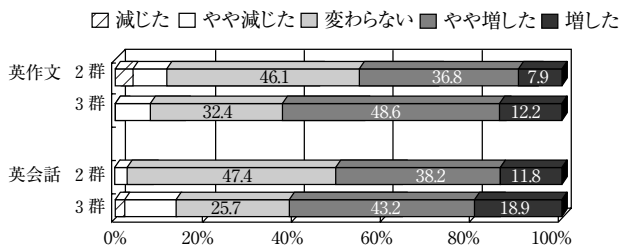


図8 授業への影響 C. 英語力上達への効果

12.2%と2群の2.6%より比率が高くなっている。第2報ですでに述べたように、3群では上級・中級・基礎クラスによって、この項目の評価がかなり異なっており、特に基礎クラスの評価が低いことが、マイナス効果の大きな要因とも言える。

差の検定の結果(表2-11, 15), 英会話では、有意差はみられなかったが、英作文では有意差( $p < 0.05$ )が認められた。つまり、英作文では、2群より3群において、習熟度別クラス編成の英語上達に対する効果を評価している学生が多いと言える。これは、学習者の能力に適したクラス編成が行われることで、学習効果が上がったためと推測される。

D. 学習意欲 英作文に関しては、2・3群ともに「変わらない」と回答した学生が、それぞれ50.0%, 38.4%と最も多い。2群では、学習意欲が「増した」(14.5%)「やや増した」(25.0%)

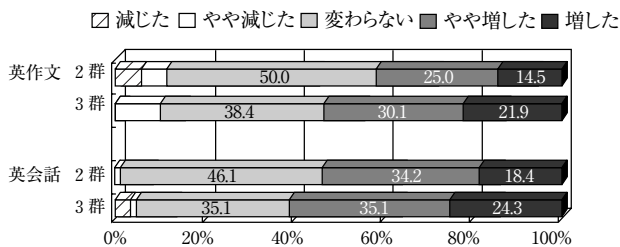


図9 授業への影響 D. 学習意欲

という回答は合わせて約4割あるが、3群では、5割強の学生が学習意欲の向上を認めている。学習意欲の低下を招いたとする回答も、3群は9.6%と2群の10.6%より若干少ない。

英会話の場合、2群では「変わらない」が46.1%と最も多いが、3群では、「やや増した」と「変わらない」の比率が35.1%と同じである。また、学習意欲の向上を認める学生は、2群が52.6%, 3群が59.5%であり、3群の方が、学習意欲の向上を認める比率が高い。しかし、学習意欲が低下したとする回答は、3群が5.4%と2群の1.3%よりやや多くなっている。

差の検定を行った結果(表2-12, 16), 英作文では有意差( $p < 0.1$ )があり、英会話では有意差は認められなかった。つまり、英作文では、2群より3群において、学習意欲がより向上したと言える。英会話においては学習意欲のプラス効果を認める学生が3群に多いものの有意差はみられず、科目に関係なく、クラスを細分化した方が、学習意欲の向上が認められると結論づけることはできない。

上記A~Dの4項目について2群と3群の差の検定を実施した結果、上述のように、英会話では授業の理解についてのみ、英作文ではすべての項目において有意差が認められた。英会話において、有意差が認められなかったのは、3群におけるクラス間の評価が異なり、特に基礎クラスの評価が低かったためである。詳細については第2報を参照されたい。全体的に見ると、両科目において、2群より3群の方が、授業の理解・授業への参加・英語上達への効果・学習

意欲のいずれにおいても、よい影響を与えたと言える。これらの結果より、2段階編成より3段階編成の方が、つまり、クラスを細分化したほうが個々の学生の能力に合った授業となり、全体的に学習効果や態度の向上によい影響を及ぼすと言えるのではないだろうか。

E. 改善点と悪化点 授業に関して何らかの変化を認めているのは、2群では、英作文が37.7%、英会話が46.1%であり、3群では、英作文が40.5%、英会話が56.2%である。3群の方が、2群と比べて、習熟度別クラス編成の授業への影響を認める比率が高いものの、差の検定の結果(表2-1, 2)、有意差は認められなかった。

英作文と英会話における改善点と悪化点について尋ねた結果を表7と8に示してある。回答が複数選択だったため、各項目についての合計人数のみを表記してある。

英作文における改善点(設問18の選択肢1~9番)の合計は、3群が96で、2群の63より多

表7 習熟度別クラス編成による改善点

項目番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	合計
英作文 2群	9	4	9	2	4	5	13	10	7	7	0	63
3群	16	9	13	10	10	12	9	11	6	2	0	96
英会話 2群	15	9	14	11	12	16	17	9	8	8	6	119
3群	21	8	19	20	11	25	15	15	16	10	1	160

注 英作文における選択肢10番と英会話における選択肢11番は「改善点なし」という回答のため、合計には加えていない。

表8 習熟度別クラス編成による悪化点

項目番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	合計
英作文 2群	4	4	7	8	5	9	3	2	4	2	15	48
3群	1	0	2	1	1	0	1	0	1	0	24	7
英会話 2群	0	0	1	0	2	3	2	0	0	3	28	11
3群	1	1	1	2	2	0	2	3	2	5	26	19

注 選択肢11番は「悪化点なし」という回答のため、合計には加えていない。

く、英会話における改善点の合計(設問30の選択肢1~10番)も、3群が160で、2群の119より多い。また、回答の傾向も少し異なる。3群では、英作文・英会話ともに改善点として、1番の「授業の理解度が上がった」、3番の「積極的に英語で発言しやすくなった」、4番の「学習内容が興味深くなった」、6番の「クラスの雰囲気に活気がでてきた」を選択した学生が多い。一方、2群では、英作文・英会話ともに7番の「周囲の学生から良い刺激を受けるようになった」が最も多く、次が、英作文では8番の「英語で書く力の伸びが大きくなった」、英会話では6番が続く。「何も良くなった点はない」を挙げた学生が、3群では英作文で2人、英会話で1人しかいないが、2群では英作文で7人、英会話で6人いることから、3群の方が授業へのプラス効果を認めている学生が多いと言える。

このように、3群の方に、2群より改善点を挙げた学生が多く、逆に、悪化点を挙げた学生は2群に多い。英作文における悪化点(設問19の選択肢1~10番)の合計は、3群が7であるが、2群は48とかなり多い。しかし、英会話における悪化点の合計(設問31の選択肢1~10番)は、2群が11で、3群が19と3群の方がやや多くなっている。クラス別にみると、悪化点を挙げた学生は、2群の英作文上級クラスが一番多く(回答数43)、次に、3群の英会話基礎クラス(回答数16)が多い。また、悪化点で5番の「授業のレベルが不適切になった」を選んでいるのは、3群では、英作文が1人、英会話2人であるが、2群では、英作文が5人、英会話が2人いる。習熟度別クラス編成の効果として、授業の難易度が適切になり、理解度が上がるという効果を期待していたのであるが、3群ではこれがほぼ裏付けられ、2群の英作文では、期待通りの結果が出なかったと言える。全体的には、悪化点は改善点に比べて少ないものの、クラスによる差、つまり悪化点を挙げた学生に2群の英作文上級クラスと3群の英会話基礎クラスの

学生が多いことの問題点を解明する必要があると言える。

### 3.3.2 英語力の変化

習熟度別クラス編成の英語力の伸びへの影響を学生がどのように捉えているのか、それぞれ英作文と英会話についての結果を表9にまとめてある。

英作文力の上達に関して、2群では「どちらともいえない」が32.9%で最も高く、「感じない」・

表9 英作文力/英会話力の上達を感じるか

		感じない	あまり感じない	どちらともいえない	やや感じる	感じる	合計
英作文	2群	15(19.7%)	14(18.4%)	25(32.9%)	18(23.7%)	4(5.3%)	76(100%)
	3群	4(5.4%)	8(10.8%)	25(33.8%)	29(39.2%)	8(10.8%)	74(100%)
英会話	2群	9(12.0%)	11(14.7%)	30(40.0%)	20(26.7%)	5(6.7%)	75(100%)
	3群	3(4.1%)	12(16.2%)	23(31.1%)	27(36.5%)	9(12.2%)	74(100%)

「あまり感じない」が38.2%、「やや感じる」「感じる」が28.9%となっており、上達を感じる学生より感じない学生の比率が高い。3群では、「やや感じる」が39.2%で最も比率が高く、「感じる」を合わせると半数が上達を感じている。また、上達を感じない学生は16.2%で、2群より低くなっている。

英会話力の上達に関しては、2群において英作文と同様の傾向を示す。3群でも、「やや感じる」が36.5%で最も比率が高く、「感じる」を合わせるとほとんど半数が上達を感じており、ここでも2群より上達を感じている学生の比率が高くなっている。

2群と3群の差の検定を行った結果(表2-3, 6), 英作文( $p < 0.01$ )と英会話( $p < 0.1$ )において有意差が認められ、2群より3群の方が、どちらの科目においても上達を感じていることが分かる。3段階編成になり、学習効果が上がったことが上達を感じる学生の増加につながったと思われる。

### 3.3.3 習熟度別クラス編成の是非

習熟度別クラス編成の是非に関する結果を表10に、習熟度別編成の必要性和編成方法希望の結果をまとめて図10に示す。

英作文の習熟度別クラス編成の是非に関しては、2・3群ともに3分の2以上の学生が肯定的

表10 習熟度別クラス編成は良かったか

		はい	いいえ	合計
英作文	2群	51(68.0%)	24(32.0%)	75(100%)
	3群	57(77.0%)	17(23.0%)	74(100%)
英会話	2群	57(76.0%)	18(24.0%)	75(100%)
	3群	57(77.0%)	17(23.0%)	74(100%)

な回答をしている。特に、3群では習熟度別編成を肯定する回答が77.0%と高く、上級クラスのみ設置した2群より肯定的な回答の比率が高い。習熟度別クラス編成の必要性に関しては、全群において必要だという回答が80%以上を占め、学力に応じた指導をほとんどの学生が望んでいることを窺わせる。クラス編成希望に関しては、1群では、上級英語や基礎英語など選択科目によって学力に対応した指導を行い、英作文自体は習熟度別編成を行わないことを望む回答が35.4%で比率が最も高く、32.9%の2段階編成希望がそれに続く。2群では、2段階編成・3段階編成希望がともに30%以上あり、選択科目による学力対応を望む回答は18.2%と1群より低くなっている。3群では、3段階編成希望が6割以上を占め、2段階編成希望が12.9%、1群で最も多かつ

必要だという回答が80%以上を占め、学力に応じた指導をほとんどの学生が望んでいることを窺わせる。クラス編成希望に関しては、1群では、上級英語や基礎英語など選択科目によって学力に対応した指導を行い、英作文自体は習熟度別編成を行わないことを望む回答が35.4%で比率が最も高く、32.9%の2段階編成希望がそれに続く。2群では、2段階編成・3段階編成希望がともに30%以上あり、選択科目による学力対応を望む回答は18.2%と1群より低くなっている。3群では、3段階編成希望が6割以上を占め、2段階編成希望が12.9%、1群で最も多かつ

た選択科目による学力対応希望はわずか7.1%という結果であった。これより、学力に応じたクラス編成を進めるにつれ、より細かい習熟度別クラス編成が学生に望まれるようになってきたと言えよう。

英作文において2群と3群の差の検定を行った結果(表2-4, 5), 編成の是非と習熟度別クラス編成の必要性に関しては、有意差はみられなかった。習熟度段階数とクラス編成希望との独立性の検定を1~3群で行った結果(表3-1), 有意水準(p < 0.01)で独立性が棄却され、両項目間に関係が認められた。

英会話の習熟度別クラス編成の是非に関しては、2・3群ともに75%以上の学生が肯定的な回答をしている。これは、2段階編成を肯とした学生の多くが、3段階編成を経験した後、2段階より3段階編成の方が学習に効果的だと感じたことを意味するのではなかろうか。習熟度別編成の必要性に関しては、2群では9割近くが必要だと回答している。3群でも必要だという回答が約8割あり、必要だと感じている学生が多いが、2群と比較するとその比率は下がっている。クラス編成方法希望に関しては、1群では、選択科目による学力対応を望む回答が31.6%

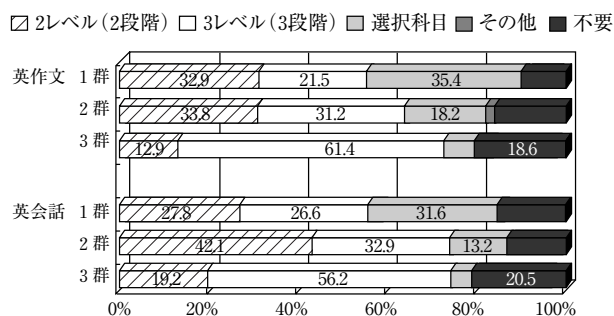


図10 クラス編成方法希望

で最も多く、2段階、3段階編成希望がそれぞれ約27%である。2群では、2段階編成希望が42.1%と最も比率が高く、3段階編成希望が32.9%、選択科目による学力対応希望は13.2%と1群と比較して低くなっている。3群では、56.2%と半数以上が3段階編成を希望し、2段階編成希望が19.2%、1群で最も多かった選択科目による学力対応希望は4.1%にすぎない。これより、習

熟度の段階を細かく分けていくにしたがって、学力に応じたクラス編成の利点を感じる学生が増えたと言えよう。

習熟度別クラス編成の是非とその必要性に関して2・3群間の差の検定を行った結果(表2-7, 8), 英作文同様、有意差がみられなかった。クラス編成希望に関しては、1~3群で、習熟度段階数とクラス編成希望の独立性の検定を行った結果(表3-2), 有意水準(p < 0.01)で独立性が棄却され、関係が認められた。

英作文及び英会話における結果より、習熟度別クラス編成の是非及び編成方法希望に関して、両科目とも同様の傾向があることが分かった。習熟度別にクラス編成を行ったことに関して、学生は、2段階編成、3段階編成にかかわらずその効果を認め、習熟度別編成の必要性を感じていると言える。しかし、2段階、3段階編成のどちらも経験した学生が、3段階編成をより肯定的に評価しており、また満足度や授業への影響に関しても概ね3群の評価の方が高いことから、クラスをより細分化することで学習効果が上がったと感じる学生が増えたと言えよう。これは、クラス編成希望の変化を見るとより明らかとなる。1群において最も多かった選択科目による学力対応希望は、2群、3群と徐々に少なくなり、3群では5%前後まで比率が下がる。反対に、1群で最も少なかった3段階編成希望が、3群では6割近くを占めるようになっ



ている。つまり、習熟度別クラス編成がより細かくなっていく過程で、習熟度別編成に忌避感を持っていた学生が、それぞれの学力に応じた授業の方が学習に効果的だと気付いたと言えるのではないだろうか。なお、3群において2段階編成を希望している学生についての考察は、第2報を参照されたい。

一つ気になるのは、英作文、英会話ともに、3群において習熟度別編成不要という回答が多くなっていることである。この回答は、英作文では上級・基礎クラスの学生が、英会話では中級・基礎クラスの学生が多い。第2報でも報告したとおり、不要な理由として「クラス編成を変えても授業内容が変わらないから」という意見が少なからずある。中級の学生に関しては、ちょうど平均的な学力のグループであり、習熟度別編成前から授業はこの層の学生をターゲットとして行われていたと思われる。そのため、習熟度別編成の効果をあまり感じない学生が他クラスより多く、その結果、不要だとする学生に中級の学生が多いのではないかと推測できる。しかし、上級・基礎クラスの学生については、この結果からその理由を推し量ることはできず、原因探究のため更なる調査が必要であろう。

#### 4. まとめ

習熟度別に分けないクラス編成、2段階の習熟度別クラス編成、3段階の習熟度別クラス編成を経験した学生の意識変化をここにまとめる。

難易度に関して、英作文では、1群、2群、3群の順で、授業の難易度が適切になったと感じる学生が増えたことが分かる。一方、英会話において、適切であるという評価の比率に大きな変化はないが、3段階編成では難しいと感じる学生が減り、易しいと感じる学生の比率が高くなっていることが分かる。

授業の満足度に関しては、両科目で、習熟度別編成が細分化されるにつれ満足度が高くなっており、3群と1群及び2群に有意差があることから、3段階クラス編成の学生が、授業に一番満足していると言える。満足の理由として、レベル、学習項目、進度の3項目について1～3群を比較したところ、英作文では、全ての項目において2群と3群には差がみられるが、1群と3群に差があるのは進のみであり、1群と2群に差があるとはどの項目においても言えないことが分かる。この結果からは、2群のレベル、学習項目、進度に関して、習熟度別編成を実施した効果があるとは言えない。しかし、2・3群間には明らかに差があり、3群の方が、1・2群と比べてレベルが適切であると感じている。学習項目が興味深く、進度がちょうど良いと感じている学生も3群の方に多い。このように、習熟度別編成を細かくした3段階で満足度が高く、各項目に対する評価も高かったことは、習熟度別編成が好影響を与えた結果であると言えるのではないだろうか。一方、英会話では、学習項目及び進度に関して、2・3群間にのみ有意差がみられる。つまり、2段階編成時と習熟度別編成前の評価を比べた場合、習熟度別編成の効果が見えないが、クラス編成をより細かくした3段階とではその利点が見られると言える。

習熟度別クラス編成の授業への影響について、授業の理解度、授業への参加度、学習効果、学習意欲、英語上達感の5項目について2群と3群を比較したところ、英作文では全ての項目



において有意差が認められた。つまり、英作文では、2群と比べて3群の方が授業の理解度が増し、授業への参加がより積極的になり、学習効果が上がり、学習意欲がより向上したと言える。一方、英会話において、有意差が認められたのは、授業の理解と英語上達感についてのみである。これは、3群におけるクラス間の評価が異なり、特に基礎クラスの評価が低かったため、3段階編成以外の要因も考え得る。しかし、英会話においても、3群の方が2群より肯定的な評価をしている。つまり、2段階編成より3段階編成の方が、個々の学生の能力に合った授業となり、全体的に学習効果や態度の向上により影響を及ぼすと言えるのではないだろうか。

習熟度別クラス編成の是非に関しては、両科目とも、約7割以上が肯定的に評価し、習熟度別クラス編成の必要性についても約8割以上が必要だと回答しており、学力に応じた指導が大半の学生に受け入れられていることが分かる。クラス編成に関する学生の希望に関しては、1群では選択科目によって学力に対応する指導を望む回答が最も多く、2群では2段階編成希望が、3群では3段階編成希望が最も多い。2段階、3段階編成のどちらも経験した学生が、3段階編成により肯定的な評価をしており、また、満足度や授業への影響に関しても、概ね3群の評価の方が高いことから、2群のクラスをより細分化することで学習効果が上がったと感じる学生が増えたと言える。

このように、習熟度別に分けられないクラス編成や2段階クラス編成と比べて、3段階クラス編成に肯定的な評価が多く見られることから、学力に応じて細分化したクラス編成により、学習効果が上がっていることを学生自身も感じていると言える。しかし、2段階編成時と習熟度別編成をしていない時の評価を比べた場合、習熟度別編成の効果があまり見えない。また、3段階編成においては、レベルの低さや進度の遅さを指摘する回答が他群と比べて多い。これらの回答は基礎クラスの学生が多いのだが、クラス分けの適切さや方法などについて、更なる検討が必要であることを示していると考えられる。

今後の課題としては、アンケート結果と学力との関連を分析することにより、より明確に習熟度別クラス編成の意義と問題点を把握したいと考えている。また、習熟度別クラス編成以外の学習効果に関係する要因等についても、更なる調査が必要である。今回は、学習者がどのように習熟度別クラス編成を捉えているかという観点から、3つの異なるクラス編成に関する比較分析を行った。今後、教師が習熟度別クラス編成の利点や問題点をどのように捉え評価しているのかという調査も必要であろう。また、今回は習熟度別クラス編成を実施している英作文と英会話についてのみ調査であったが、今後、他についても習熟度別クラス編成の導入とその影響を検討する必要があるであろう。習熟度別クラス編成の在り方を多角的に検討するために、学習者及び教師のアンケート調査、英語力テストの実施、英語力向上と関係する要因の探求等、更なる調査と分析が必要であると思われる。

## 謝 辞

アンケートに回答してくださった学生の皆さん、アンケート入力に御協力頂いた大山祥子さんと松本さとみさんに感謝致します。特に、統計解析を実施するにあたり、貴重なご助言を多数頂いた鹿児島大学理学部の宿久洋先生に深く感謝の意を表します。

参考文献

- 1) <http://www.asahi.com/edu/news/K2001082200006.html> (朝日新聞：平成13年8月24日)
- 2) 鳥飼久美子・進藤久美子 (1996)「大学英語教育の改革」三修社.
- 3) 大阪女学院短期大学 (1998)「自己検討誌・何ができて、何ができていないか」大阪女学院短期大学
- 4) [http://www.fukujo.ac.jp/english/u\\_e\\_j-cur\\_index.html](http://www.fukujo.ac.jp/english/u_e_j-cur_index.html)
- 5) <http://fliwww.ge.kanazawa-u.ac.jp/kousou/>
- 6) 田原良子・堀江美智代・竹内光悦 (2001)「習熟度別クラス編成に関する考察(1)」鹿児島純心女子短期大学紀要 第31号
- 7) 堀江美智代・田原良子・森永初代 (2002)「習熟度別クラス編成に関する考察(2)」鹿児島純心女子短期大学紀要 第32号

